これからの文体論

―― 日本の大学における教育的文体論 ――

上　田　　修

はじめに

A Linguistic Guide to English Poetry（1968）で G. N. Leech が，また，*Stylistics and the Teaching of Literature*（1975）の中で H. G. Widdowson が，語学的な視点からの分析方法を文学作品理解の実践的な手段として紹介して以来，英語文体論は日本の大学の英米文学講座で本格的に紹介され始めた。その後，英語文体論は，英語圏では一方で痛烈な批判も浴びながらも，大学教育の場において着実にその存在意義を確立して行った。

言語分析を通して文学作品の理解を深めることに有効な文体論は，「文学研究」の手段として採用されてきたが，同時に，文学や英作文さらに EFL などの「授業」においても応用されている。英語圏では，一般に後者は総合して pedagogical stylistics（教育的文体論）という分野として認知されている。

本稿では，特に Widdowson（1975）以降の約30年間の文体論の流れの中での教育的文体論，その中でも文学との関わりにおける教育的文体論の基本姿勢をとらえ，日本の大学における文体論の現状を概観したうえで，教育的文体論は日本の大学の教育プログラムの中でどのような貢献の可能性を秘めているのかを考えてみたい[1)]。

文体論概観

そもそも「文体」とは一体何なのか。斉藤（2000）の説明を借りるなら，これまで「文体」の定義には，「装飾 ornamentation」「個人の言葉の癖 ideolect」「選択 choice」「逸脱 deviation」「一貫性 coherence」「共時性 connotation」などがあったし，また「意味の変異を伴わない言語的変異体のなかからある価値を選択するに当たっての，テクスト共同対内部の（一貫した）偏差，またその一貫した選択方法」といった「冗談みたいに疑似科学的な定義」などもあった。さらに，「逸脱を一貫して選択する」という具合に複数の概念で捉えることも可能であった。「文体」を定義しようとすると，このようにキーワードが増えて行くのは，これらの定義が「文体の違った側面に焦点を当てたものであり，それぞれ相補的な関係にある」ためでもある。さらに斉藤は，「『文体』は，いわば（言語学と文学研究）両分野の間の漠然とした空隙を漠然と言い表す概念として用いられているにすぎない」と結論づけている[2)]。

要するに，「文体」は漠然としか定義できないものとしかいいようがないのかもしれない。確かに，作家の文体研究に関われば関わるほど，「文体」とか「スタイル」とかいう言葉を使うことに躊躇してしまう。それはおそらく，1）「文体」は Form と Meaning との相関的な関係の中で捉えられる，2）「文体」は何らかの効果と関係している，3）「文体」は作品の（精密な）読みを通して体感するものである，といったことが原因となっているのではなかろうか。「相関的」「効果」「体感」，これらが何を意味するのかといえば，「文体」というものは，多かれ少なかれ，読みの経験や直感と関わっており，それがなくては Form と Meaning の関係から生まれる効果は理解できないということであろう。つまり，いくら客観的な分析方法を選ぼうと，「文体」というものに行き着く前に，「読みの経験」や「読みの際の直感」といった主観のフィルターを通る必要がある。したがって，作家の文体を考察する際には，自分の持つこのフィルターの精度に関してかなりの確信が必要となる。客観性を配慮する研究者であれば，そこに躊躇の原因をみることができるで

あろうが，文体論的アプローチが定着する前はそうとも言えず，文学界や大学の授業では，フィルターの精度を自負する権威ある学者の直感や経験さらに意見力などが基準となっていたのであろう。こういった研究・教育の世界で学ぶ学生に，Leech や Widdowson の紹介した英詩分析は，科学的分析の可能性を示したように思われる。

とはいえ，一般論としては，文体論は相変わらずとらえにくい分野のようである。「文体」自体が漠然とした概念のものであるばかりでなく，文体論の分野が，文学なのか語学なのかはっきりとしない fussy なスタンスを守っており，さらに，独自の理論をほとんど持っていないからであろうか。作家のとらえどころのない「文体」を探る上で，さまざまな側面にメスを入れようとしてきたこの分野では，分析の際に応用する理論も当然多岐に渡る結果となった。したがって，文体論の理論的な進歩ということになると，分析に応用する言語研究分野における理論の進歩にそのほとんどを負っている。

テクストと読みに関する批評理論で特に進歩が目覚しいものをあげるとするならば，それは discourse 理論および語用論の発達に伴うものがあげられるだろう。Discourse に関して言えば，コンピュータやインターネットなどハード面での発達にともない，言語コーパスが分析可能な程度にまで蓄積されてきたことにより，文体論で分析対象にする言語ジャンルに広がりが生まれた。語用論について言えば，G. N. Leech にはじまり，Sperber & Wilson の関連性理論，そして，Brown & Levinson のポライトネス理論などの文体論への影響が大きいように思われる。また，発展というよりは，文体論への本格的な応用という意味では，Leech（2002）が示唆しているように，ストーリーとプロットの研究も注目される。これは，物語論の本格的な応用ということになるであろうか[3)]。

教育的文体論概観

このような流れの中で，文体論と学校教育との関わりはどうであったのだ

ろうか。はじめに述べたが，英語圏での教育的文体論の起点として考えてよさそうなものは，Leech（1968）およびWiddowson（1975）であろう。特に後者は，研究分野と教科との区別をした上で，学生を念頭においた授業の立場から文体論の重要性を主張した：

> My purpose is to show the relevance of stylistic analysis to the teaching of literature and not (except incidentally) to the practice of literary criticism as a discipline.
>
> Geneticists, biochemists, linguists and literary critics for example all follow certain principles of enquiry which characterize their different disciplines. But students are not geneticists or biochemists or linguists or literary critics: they are in the process of acquiring principles not putting them into a certain number of these principles and will never achieve the discipline as such at all.
>
> H. G. Widdowson. *Stylistics and the Teaching of Literature*, Longman (1975)[4)]

彼はすでに確立されている文学批評を単に覚えるだけのrote-learning的な授業に繰り返し疑問を投げかけ，その解決手段として，文体論の重要性を強調したのである。また，彼は，作品の解釈は最終的には決して自由奔放なものではなく，制限の範囲内のものであると主張する。どこまで自由になれるのかといった指標となるのが，文学と語学の橋渡し的な役割を持ち，しかも客観的な分析方法を提示した文体論なのである。このような態度を貫くことで，“Anything goes（なんでもあり）”的な解釈が横行しがちな文学批評に制限をかけ，学生に客観的文学批評を示そうとしている。

LeechやWiddowsonが取り扱った題材は，英詩であったが，その後，文学批評に関わる文体論が取り扱う分析対象は，詩から散文，そして戯曲へと広がりを見せ，それらを対象にした文体論は学生のための入門書の形で紹介されてきた。詩から散文への広がりは，Widdowson（1975）前後にもDavid Lodgeの*Language of Fiction*（1966）やRoger Fowlerの*Linguistics and the Novel*（1977）のような名著の中で示唆されていたが，G. N. Leech and M. H.

Short の *Style in Fiction*（1981）（以下 *SIF*）によって英語散文の分析方法が体系的に提案され，その後散文の文体分析が分野として確立していったように思われる。戯曲の文体分析は，Deirdre Burton の *Dialogue and Discourse*（1980）において discourse 理論との関係で論じられてから，M. H. Short（1996），Paul Simpson（1997），Peter Verdonk（1998）などにより紹介されている。しかしながら，これらの分析は，戯曲のスクリプトの表面的な分析にとどまっているように思われる。戯曲を分析する際には，登場人物間の会話のやりとりやト書きの分析だけでは明らかに不十分であり，さらに改良を要する。

文体論一般が取り扱う分析対象としては，文学作品の言語だけでなく，新聞，広告，スポーツ，政治，ユーモアの言語などにも関心が広がっており，ジャンル文体論に発展してきている。そして，Carter & Goddard 編の Intertext Series に見られるように，これらのジャンルの言語に関する考察もまた，授業での題材として目を向けられてきている。また，Carter が *Language and Creativity : the Art of Common Talk*（2004）で例証しているように，話し言葉のコーパスの充実にともない，研究対象が本格的に話し言葉の creativity へと進む傾向も見せ始めている。この傾向が進み，今後さらに話し言葉のメカニズムにまで論が及んでくると，小説や戯曲における登場人物間の会話分析の精度が増し，教育的文体論にも大いに貢献することは間違いない。

日本における文体論概観

Widdowson 後，*SIF* を経て，文体論は英語学研究者のみならず文学研究者からも注目され，文体論に興味を持つ研究者・学生の人口は，決して多くはないが，着実に増えてきたのではないかと思われる。*SIF* をはじめとする文体論の理論書の一般的な構成が，文学作品の抜粋とその言語学的解説であるために，読み物として興味をひくということも大きな要因である。また，紹介されている理論も英語学の分野では基本的なものが多いので，多少の改変

や発展があったとしても，勉強をし直すほどの大きな変化もないという事実も一因であろう。したがって，授業の講読などで利用するにも，格好の教材になった。海外では激動の時期を経験していた文体論であったが，日本の大学では，文体論（特に文学批評にかかわる文体論）という分野の紹介そのものが淡々と続いていたと言ったほうがいいかもしれない。つまり，文体論という分野の存在意味を考えたり，文体論の理論的発展に貢献するということではなく，現実的には，*SIF* をはじめとする理論書を授業で読むとか，理論書にしたがって自分の専門とする作家の作品の言語研究を進めるといった時期が続いていたように思われる。そこには，Widdowson のような，授業と研究の明確な意識的区別はなかったのではないだろうか[5]。

しかし，近年では，文体論の理論をただ当てはめるだけの研究から，既存の理論を自分流にアレンジしたり，新たな理論を提案する研究者も出てきた。その代表的なものは，斉藤（2000）であろう。文体論は，完成されたテクストを提示されているという前提が先ずあり，そのテクストをどのように分析してゆくのかが典型的なプロセスである。それは，例えば Leech and Short（1981）で提案されたチェックリストなどを活用することで分析への手がかりとするわけであるが，斉藤（2000）では，テクストを完成するまでのプロセスに焦点を当てた文体論が提案されている。こういった意味において，これは文体論独自の理論の提案と呼べるかもしれない。斉藤はこれを創作文体論（creative stylistics）と呼んでいる。作品の創作段階にフォーカスを置くというはっきりした立場をみせている斉藤の提案は興味深い。日本での教育的文体論を考えた場合に，この創作文体論の提案する方向性は，書き言葉以外の創作芸術（映画，歌，芝居など）の分析・鑑賞にも大いに活用できそうである。これは，主に「書かれた英語」を対照にした文体分析から，英語以外による創作品（例えば日本語の映画）などの意匠分析へと視野を広げるきっかけとなるように思われる。筆者は，日本における文体論は，こういった方向性を持つべきではないのか，としばしば思うことがある[6][7]。

上記のようなポジティブな現況があるにせよ，それはあくまでもごく一部

の研究者によるものであることは否めない。英語学概論のテキストで文体論の章を組み入れているものがあまりないことからもわかるが，大学の授業現場では，文体論という分野を概論的に紹介する機会すら少ないのが現実であろう。学生が文体論に触れる機会といえば，何らかの形で文体論に関りを持つ研究者が，大学の英語専科の授業における「英語文体論」の講義または文体論的視点を入れた「講読」や「言語」関係の講義などで取り扱う場合に限られるであろう。

日本における教育的文体論概観

日本での教育的文体論の現状はどうなのであろうか。試しに，Google のサーチエンジンを使い「教育的文体論」の語で検索してみると，２点ヒットするのみであり（2005年10月８日現在），“pedagogical stylistics”の検索用語を入力しても，ヒットする日本のサイトは２点のみで(2005年10月８日現在)ある。このように「教育的文体論」という概念自体が意識されていないことからも想像できるが，文体論一般をながめても，ほとんどの場合，大学のごく限られた授業に，文学批評のための文体論が研究領域の一部としてとどまっているという現状があり，さらに教育的文体論は，そういった作品研究の文体論の影に隠されてしまっている状態である。我が国の文体論は，英語圏でのように言語や文学教育の授業手段として活用するという意識を持ってカリキュラムに組み込まれていないので，教育的文体論として息吹を吹き込まれていない状態である。授業手段としての文体論は言うまでもなく，英語圏で行われているような EFL 教育への応用などが文体論を意識した形で行われている例などもほとんどないと言ってよい。

日本における文体論・教育的文体論の問題点

日本における文体論の問題点

以上，英語圏と日本での文体論および教育的文体論の流れを概観してきた。

このセクションでは，日本における文体論，日本の教育現場における文体論について，問題点を述べたいと思う。

文体論者が，よりどころにしている基本的な研究姿勢は，英文テクストの「精密な読み」である。日本人研究者の気質とも合ってか，この伝統はことさら強調されてきている。日本人にとって英語は外国語であるから，日本人は，英語のネイティブスピーカーにとって普通に読み進めてしまうような細かな点にまで気を配りながら読む必要があり，そのおかげで日本人特有の発見もありうる。日本人にとっての「精密な読み」には，このような期待が込められている。確かに，日本人が日本語のテクストを読む際，語彙や統語に最新の注意を払いながら読んでいるかといえば，そうではないので，これは，ある意味的を射た見解であるのも事実である。このようにノン・ネイティブスピーカーならではの視点という立場を強調することによって，一見ハンディキャップと思える点を利点に変えているわけである。

しかし，文体論的な研究では，「精密な読み」は英語ネイティブスピーカーにとっても当前の前提であることは，再認識しておくべきである。つまり，英語圏の文学作品への文体論的アプローチは，日本人にとっては，かなり垣根の高いものだとも言えるのである。また，Carter や Widdowson などが分析の出発点とする，読後の intuition「直感」という考え方に基づいた分析などは，前述のフィルターの問題に関わることであり，分析や論旨を進めても，結局最後はネイティブスピーカーの意見を仰ぐことになりかねない。文体論的な英米文学作品の研究は，我々日本人には非常に困難な領域であるのも事実である[8)9)]。

日本における教育的文体論の問題点

日本での教育的文体論に目を移すと，筆者には，1）教科としての文体論と研究分野としての文体論の区別をする，2）学生の英語レベルと教材のバランスを考える，の二点が考慮すべき点ではないかと思われる。

最初の点は，教える側の意識の問題である。文体論が関係する授業の目的

は，この分野の研究にあるのではなく，この分野の理論や視点を学生の文学教育や英語教育のために利用すること，という意識を持たなくてはならない。学部の学生に対する授業であるにもかかわらず，研究者養成のための授業と呼んでよいようなケースが往々にしてみられるのではなかろうか。一流の文学作品の言語を研究するというのは，研究者や院生がやればよいことであり，学部教育カリキュラムの一つとして文体論を考える場合には，非常に不自然なことである。

次に学生の英語レベルと教材のバランスの問題である。文体論を概論的に紹介するのであれば，英語や英米文学専攻の大学生なら，伊藤・隈元(1982)または斎藤（2000）などのような概論的なテキストでおそらく問題ないと思われる。また，あくまでも概論的知識の授業であれば，日本語専攻の学生に紹介するのもおもしろいかもしれない。

しかしながら，文学理解のために文体論的なアプローチを試みる場合は，選ぶ作品と学生の英語レベルとのバランスを真摯に考慮するべきである。具体的には大学の英米文学専攻科以上の学生が対象となり，それ以外の学生には，こういった授業は酷というものであろう。授業で取り扱われる理論書や文学作品の難易度が，あまりにも学生の英語力にそぐわなく，現実離れをすることがないように注意を払うべきである。文学と言うとつい高尚な題材をと考えてしまうが，教師の研究分野や好みによる授業計画は捨て去り，学生の英語力にあった授業を第一に考慮するべきである。前述したように，文学作品の言語を取り扱う文体論は，教える側にも教わる側にも，相応な英語の知識や文化的な背景がなければ未消化に終わるものである，ということを認識しなおす必要があろう。しかしながら，ここで言う題材と学習者の英語レベルのバランス調整というのは，決して，やさしい題材の選択やリトールドのテクスト選択を意味しているのではない。学習者の英語レベルが高ければ，どんな難解な作品であろうと読ませて構わない。しかし，周知のごとく，日本の大学の学部生の英語力の現状は，それほど楽観視できるものではない。英米文学の専攻と言えど，原文の彩を堪能できる力を持った学生がどれほど

存在するのかは，疑問である。学部学生には，レベルにもよるが，現代の短編小説などに限定したほうが無難ではなかろうか。文体論的な考察を取り入れる場合，原文を理解する力が前提であることを，常に教師は認識しておくべきである。学生のみならず教える側の英語力も過大評価せず，素直にレベルにあった素材を使うことに対する抵抗感を失くすことが先決ではないだろうか[10]。

日本でのこれからの教育文体論

これまで，教育的文体論の一般的な流れを概観しながら，日本における現状，特に文学との関わりにおける教育的文体論について触れ，英語圏で行われている教育的文体論に近づけるための意識的な微調整について二点に絞って考えてみたが，図にすると以下のようになるであろう：

ここで今一度，日本における教育的文体論の意味について考えてみたい。確かに，Widdowson をはじめとする文体論者たちのテキストは，その目的に「文学作品の理解」をあげている：

> This book might be described as an exercise in applied stylistic analysis. Its principal aim can be stated quite briefly : to present a discussion of an approach to the *study* of literature and a demonstration of its possible relevance to

the *teaching* of literature.

H. G. Widdowson. *Stylistics and the Teaching of Literature*, Longman (1975)

An earlier book in this series (*A Linguistic Guide to English Poetry*) was written with the aim of showing the student of English that examining the language of a literary text can be a means to a fuller understanding and appreciation of the writer's artistic achievement. The present book is written with the same aim in mind, this time taking prose fiction, not poetry, as the object of study.

G. N. Leech and M. H. Short. *Style in Fiction, Longman*, (1981)

By now it should be apparent that stylistic analysis is a method of linking linguistics form, via reader inference, to interpretation in a detailed way and thereby providing as much explicit evidence as possible for and against particular interpretations of texts.

Mick Short. *Exploring the Language of Poems, Plays and Prose*, Longman (1996)

The goal of this book is to sharpen your awareness of how language works in texts—particularly, here, in literary texts.

Stylistics is the study of the language in literature.

Michael Toolan. *Language in Literature*, Oxford University Press (1996)

First and foremost, this is a book about modern English language.

To be more specific, this book offers an introduction to English language through the medium of literature in English....The branch of language study which is principally concerned with this integration of language and literature is known as *stylistics*.

Paul Simpson. *Language through Literature*, Routeledge (1997)

In particular, as a result of their (the students) responses, I have come to believe very firmly that stylistics can lend strong support to literary critical appreciation by providing textual substantiation for the different kinds of literary effect a text may have on the reader.

Peter Verdonk. *Stylistics*, Oxford University Press (2002)

また，日本で出版された文体論のテキストの序論にも，同じ趣旨の記述がある：

英語の genius を理解するためには英文学の作品に是非共ふれねばならない。そうしなければ英語の重要な面を見逃すことになるであろう。

一方，最近の言語学の発達は目覚しいものがある。英文学の言語を研究する際にも，新しい言語理論をなおざりにはできないし，また新しい理論を適用することは英文学作品に見られる英語の genius を知る上で一層実り多きものとなる出あろう。また，英文学そのものの理解・鑑賞にも役立つであろう。

伊藤弘之・隈元貞広　『英語学概論』文学テキストの分析を中心とした
篠崎書林（1982）

文体論は，言語学と文学研究をつなぐ求心力として発達してきた学問であり，近年では，とくに英国・英連邦諸国において，語学・文学教育の方法としても注目を集めています。文体論などどいうといかめしい感じがするかもしれませんが，基本的には文学を言葉に即して読み解くための理論ですから，英語の勉強の延長として文学の英語を勉強してみたいという人，あるいは英語文学を語学的に読んでみたいという人なら，誰でも簡単に学ぶことができます。

斉藤兆史　『英語の作法』　東京大学出版（2000）

日本における教育的文体論は，英語圏の文体論者の謳う「文学作品理解のための文体論」という目的を持つだけで十分なのであろうか。否である。というのは，こういった目標を掲げて行われている英語圏での授業は，日本の大学のそれと全く違うことが予想されるからである。海外の授業では，活発に意見交換が行われ，時には学生と教師の激論さえあるであろう。学生は，そういったやり取りを通じて，表面に出された授業目標以外のものをも吸収している。英語圏では，文学理解のための授業といった場合，アメリカの Literature Circle が良い例であるが，文学作品を題材にものごとを考えるきっかけを与えるということが含意されている場合が多い。しかし，日本の授業で外国文学を取り扱う場合は，書かれている意味や内容の理解で時間切れとなり，そういったことがあまり望めないように思われる。したがって，日本の教育的文体論が目的とするところには，英語圏では当たり前の部分を，あえて書き加えておく必要があると思われる。

そもそもなぜカリキュラムに文体論または文体論の視点を反映した講読の授業を組み込んでいるのか。文体論研究者は文体論を通じて何を学生に教えようとしているのか。Widdowson などを引用し，「文学作品理解の力や感性を磨くため」と説明しても，果たしてそれが日本の学生にとって十分な説得力を持つ内容であろうか。現在の日本の大学受験の状況を考えてみるとよいが，文学部に入学した学生のどれほどの者が，実際に文学を志しているのか。もちろん，このような問答は，英語文体論に限らず，文学系の学部の存在理由そのものにも関わることである。文学研究者は，一体大学で何を学生に教えようとしているのだろうか。文学系の学部の社会的貢献とは一体何なのか。このような問いは現在日本社会が大学に突きつけている大いなる疑問であり，教師はこういった現状を再認識するべきである。

このような問題を考える際に，Simpson の「文体論の良い点は heuristic な価値を持つことである」という言葉がよいきっかけとなるのではないだろうか：

> One of the main assets of modern stylistics is its heuristic value. Stylistics is a method of applied language study which uses textual analysis to make discoveries about the structure and function of language. Simply put, finding out about what writers do is a good way of finding out about language. This basic heuristic principle－the principle of learning and discovery－will inform every subsequent chapter in this book.
>
> Paul Simpson. *Language through Literature*, Routeledge (1997)[11)]

Simpson は，文体論の一つの意義を，学生が発見を伴う学習をすることに見出しているように思われる。彼は，言語や文学の領域に限ったコンテクストで heuristic（発見的学習）という語を使っているが，筆者は，この語を，日本における教育的文体論のキーワードとしてとらえ，もう少し概念的に広げて，以下のような意味で考えてみたい：

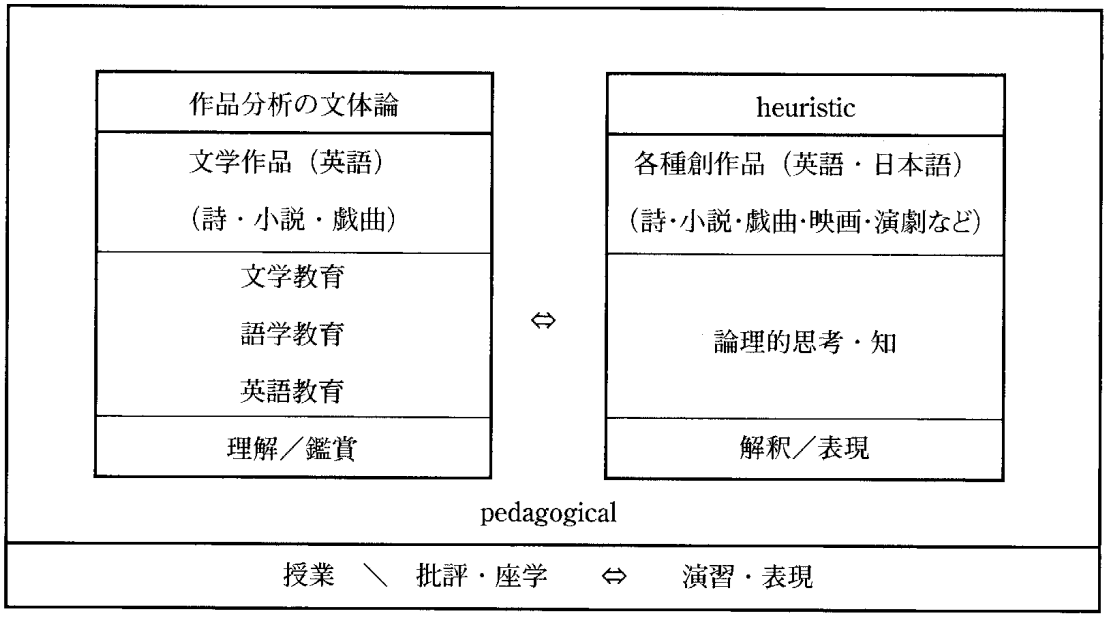
教育的文体論におけるキーワード“heuristic”の定義：

Heuristic-(a) 学生が自分自身で何かを発見すること。（もちろん，教師のガイドは伴うが，rote-leaning に慣れている日本人の学生には，きわめて重要なポイントと思われる。）

Heuristic-(b) 学生が発見するのは，文体論的な視点からのもの，すなわち，表現・内容（キャラクターやプロットなども含む）に関わるものであること。（これは，文体論的な教授法を問題にしているわけであるから，当然といえば当然である。）

Heuristic-(c) 学生が，これらの発見を解決するために，論理的な思考を試みること。（上記「発見」には，「疑問を抱く」という意味も含む。）

これら三点の中で，特に Heuristic-(c) が，日本の大学の教育的文体論で意識的に強調されるべき点であろうかと思われる。先ほど，「英語圏では当たり前の部分を，あえて書き加えておく必要がある」と述べたのも，この点である。筆者は，文学系の学部の存在意義の一つは，論理的思考力を備えた学生の養成ではないだろうかと思っている。この大前提の中で，文学専攻の学生は，文学作品を題材としながら，人間の論理的および非論理的思考や行動などを受け入れるような視点を身につけてゆく。こういった場を提供することに，文学系の学部の存在意味があるように思われる。文体論を通しての文学理解の授業は，単に英語で書かれている内容について理解を深めさせるだけでなく，学生自らが言語事実やプロット・キャラクターなどのテクスト構成に関する疑問点を発掘し（上記ポイントでは Heuristic-(a)(b) のこと），その解決のための論理的な思考訓練をする（上記ポイントでは Heuristic-(c) のこと）格好の場を提供することが可能であると思われる。教育的文体論は，授業の中で思考訓練の言わば触媒的役割をするように思われ，ここに日本における教育的文体論の意味を見出したいと思う：



（授業がheuristic-(c)を中心に進められる場合は、英語の教材でなくてもよい場合がある）

さて，このような heuristic な活動を意識した教育的文体論を教育現場で実現することは，それ程困難なことではない。教師が，研究主体の授業から教育主体の授業へと意識を移し，さらに，論理的な思考育成へと授業のフォーカスを拡大させるだけで可能となるからである。こういった実践は，論文指導の際に成されてきたことであり何の新鮮味もないという反論もあるだろうが，ここでのポイントは，ごく一般的な学部学生のための授業の中で効率よく行われるべきであるという点である。

以下，参考までに，筆者が学部３年生の「英語演習」科目で行うモデルケースを見てみよう。

この授業は，英語を専攻する学生を対象に行う。テクストとして，Roald Dahl の短編 “The Wish”（1959）を選んだ。前述したように，本短編を授業で扱う際の大前提は，教師と学生が共に，この作品の英語レベルに達しており，原文で理解する際に問題がないということである。この作品は，学生が，内容を読み取るばかりでなく，英語表現に何らかの疑問を持ったり，発見したりするのに，ちょうどよいレベルの英語を提供すると思われる。また，内

Text : Roald Dahl's "The Wish" (1959)

テクスト選定の理由	
(1) 英語のレベル	英語が比較的平易である。
(2) 授業時間と教材の量	現代英語の短編であるので，精読に適している。
(3) 内容*	物語の内容が，読者の幼少の頃の経験を思い起こさせ，親しみを持てる。
内容**	文学上の評価がまだ定まっていないので，解釈の際に騒音が少ない。
内容***	読後，結末になんらかの謎を感じる。
授業でのポイント	
(a) 小説のしくみ	語り手と登場人物を含む「語り」の構造
(b) 表現上の手法	話法，特に描出話法（自由話法）の紹介
(c) 文体論的視点	表現方法と表現内容との関係
(d) 観察上の基本的な姿勢	既存の範疇分けに固執しない考え方
(e) 解釈の可能性	作品を味わうこと

(d)(e) の太字は，(d)(e) が主に Heuristic-(c) の要素が強いことを示している。

容についてであるが，"The Wish" は何かしら謎めいたエンディングを持った短編であるので，学生の好奇心を刺激できるのではないかと思う。こういった教材選定上の配慮（テクスト選定の理由(1)～(3)），および，授業でのポイント (a)(b) および (c) の設定は，文体論の視点からの作品理解を念頭に置いた授業を意識している。前述の heuristic をキーワードにしたポイントで言うと，Heuristic-(a)(b) ということになる。未だに日本のフィクション講読の授業が，翻訳を中心に進められがちであることは否めない事実である。授業でのポイント (a)(b) のような内容が，翻訳と言う作業を通して自然に伝えられているという見方もできないではないが，例えば過去時制が物語の標識になるというような極めて基本的な内容を学生が認識していないことを考えると，小説のしくみや表現上の手法に関する基礎的な内容を体系的に教えておくことは意義のあることのように思われる。授業のポイント (c) の文体論的視点であるが，この短編の場合，「繰り返し」と「文体」そして「テーマ」の関係に焦点を当てて授業を進める。その中で，学生に繰り返し表現が多いことに気づかせ，繰り返しには，単語，句，節，文型など単純なものから，

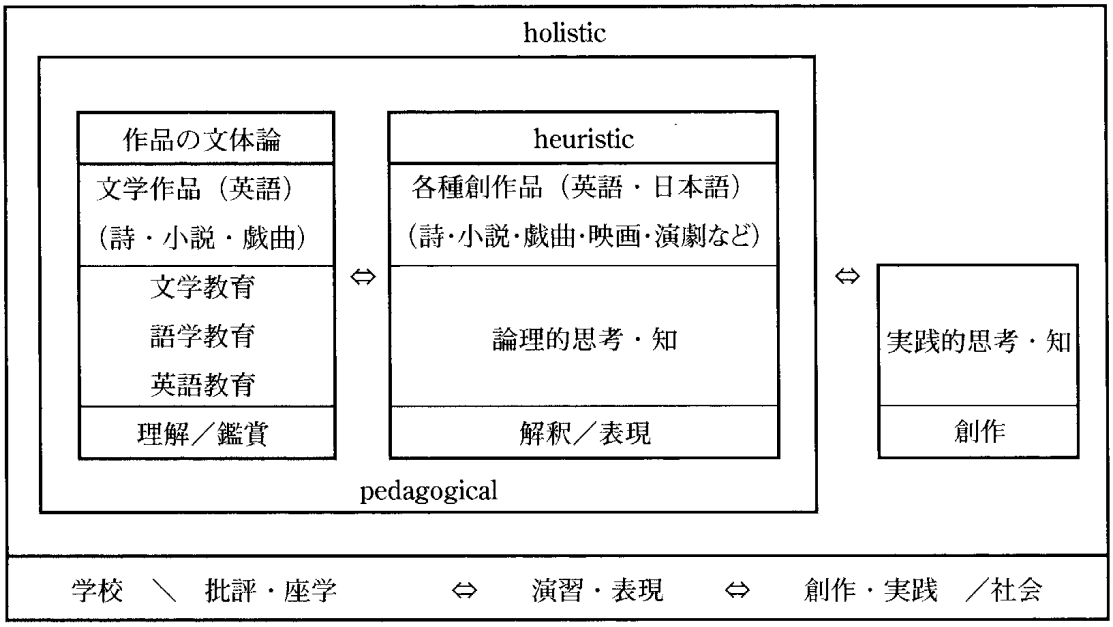
表現は違えど内容が繰り返されている例などもあることを紹介する（Heuristic-(a)(b)）。この短編の場合は，繰り返し読者が視点を移動させられる点が何かしらの意味をもつこととなるであろう。こういった繰り返しに気づくことにより，短編のテーマに関する新たな解釈の可能性を見出すという文体論ならではの読みの経験へ導く（Heuristic-(c)）。

授業でのポイント (d) 観察上の基本的な姿勢については，文体論的なアプローチならではの指導内容といえる。学生は，作品の表現を分類する場合に，しばしば，目の前の用例を既存の理論範疇にねじ込んでしまおうとする傾向がある。“The Wish”に見られる表現で例にあげるならば，DT と FDT の中間の表現を認めずにどちらかに振り分けてしまおうとするのである。中間の表現があるならば，それを両範疇にまたがる表現としてとらえればよい。学生には，こういった一見単純な見方が，なかなかできない傾向がある。このような内容は，文学や語学を離れて，物の見方の訓練につながるであろう（Heuristic-(c)）。同じようなことは，授業のポイント (e) 解釈の可能性に関する議論の場においても言えることである。“The Wish”では，蛇の存在が一つのポイントになると思われるが，その際，「蛇はいた」「蛇はいなかった」という二者択一の方向へと議論が進んでゆく傾向がある。しかし，これも授業のポイント (d) と同じく，物の見方の練習であり，どちらの可能性も認めた上での解釈に気づかせる指導をする（Heuristic-(c)）。

Heuristic から Holistic へ：

以上，問題点も含めて日本の大学での教育的文体論について見てきた。しかし，文学系の学部教育の社会的貢献ということを考えた場合に，「文学表現の彩を味わうための素養や英語力を持たせる」「センスを磨く」さらには「論理的思考力を養う」といった文体論の教科書的目標を謳うだけで十分なのであろうか。上に提案した実践的な教育的文体論は，学生の思考力を刺激する触媒的役割として最適なものになると思われるが，学生の論理的な思考

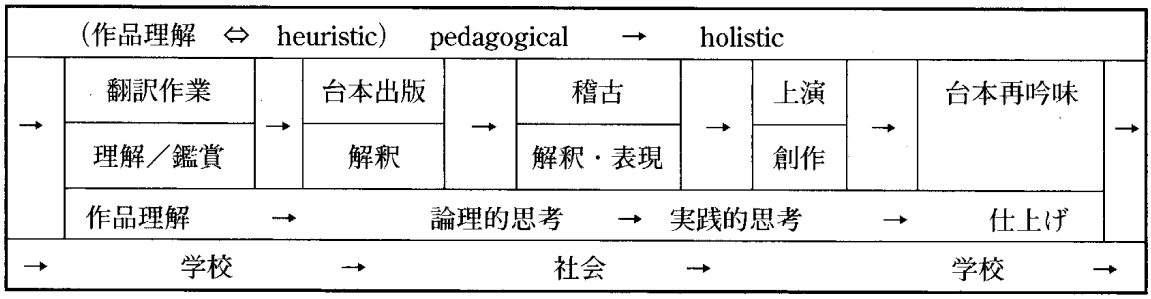
力や創造性などは，社会とのかかわりの中での実践的な思考・知といったものとして養われるのが望ましいのではないだろうか。人として社会の中でポジティブに生きてゆくための環境を提供することを考えるべきであろう。こういったことを考える際，holistic という語がキーワードとなると思われる：



筆者は2002年以降，演劇専門の人文学部表現学科岩井眞實および短期大学部英語科道行千枝と共に，英国の現代劇『クローサー』(1997) および『ハワード・キャッツ』(2001) を選び，次頁に示すように，翻訳作業→台本出版→稽古→上演→再吟味といった一連の流れの中で，holistic education を学部学生と共に試みてきた。Holistic education という語は，現在さまざまな分野で使われており，その定義もまちまちであろうが，我々のプロジェクトでは，以下のような特徴を意味するものとしてとらえている：

1）多様なコンテクストの中に教師と学生がともに身を置くこと。
2）教師と学生のコミュニケーションが双方向であること。
3）学生のみならず，教師もともに成長すること。

演劇自体，学生を多様なコンテクストに放り込むことが可能であるが，さらに学校の授業という場での作品理解から教室を離れた社会での上演までを一つの流れで実現する場が用意できるならば，演劇と文体論の組み合わせは，holistic な教育に最適のジャンルと言えよう。というのは，前述したように，英語圏の教育的文体論の授業と日本のそれとの決定的な違いは，教師と学生の双方向のコミュニケーションが授業の場であるかどうかであるからだ。日本では文化的な要因もあるためか，どうしても，双方向のコミュニケーションが生まれにくい。そのため，教師は授業に対する考え方，使用テキスト，学生の英語レベルなどを意識し授業計画を立てるべきであると述べてきたのだが，ここに紹介している演劇を題材にしたプロジェクトの中では，ごく自然な形で教師と学生とのコミュニケーションが生まれるので，ある時期をすぎると，学生自らが heuristic な環境を作り始める。また，文体論との関わりで述べるならば，こういった環境で戯曲に触れると，学生のみならず教師までもが，登場人物間の会話分析やト書きの分析だけで済まされるテクスト上の作品理解が，それがどれほど詳細な文体分析を駆使したものであろうと，所詮机上の空論で終わっているのを実感することができる。言い換えれば，現在の戯曲の文体分析には，どのような点が欠如しているかを知ることができるのである。また，上演に際しての社会との関わりの中で作品を見直すと，戯曲と言うものがいかにビジネスの視点から創作されているかということさえ見えてくる。このような体験を通して，学生のみならず教師も成長してゆくのである[13]。



ま と め

教育現場でのこれからの文体論は，研究者養成のための一教科ではなく，学生のための教育手段として機能することが先決であり，そのためには，教師の意識改革，カリキュラムの整備，テキストの出版といった環境整備が早急に必要である。しかし，そういった環境が一旦整えば，教育的文体論は，なんらかの形で社会との関わりを持った教育を学生に提供することを容易にし，文学部の存在意義を世に示す上で多大な貢献をする一分野となるであろう。

Notes

1) 本稿は，2005 年 10 月 29 日の日本英文学会九州支部における英語学シンポジウム『これからの文体論』における発表原稿をもとに，加筆したものである。

2) 斉藤兆史　『英語の作法』東京大学出版（2000）pp.160-1。括弧は筆者による。

3) 例えば，土田・青柳『文学理論のプラクティス』新曜社（2001）による現代文学批評のパラダイムでも，文体論は，テクストと読みに関する批評理論という点において，ロシアフォルマリズムとの並列関係の中，物語論や記号論などの構造主義文学理論を見守りながら発展してきた分野に位置づけられており，構造主義文学理論との間に一本関係線が引かれているにすぎない。

　また，物語論については，以下を参照。『小説の文体』英米小説への言語学的アプローチ　ジェフリー・N・リーチ　マイケル・H・ショート著　筧壽雄監修　研究社（2002）付章　20 年を経て。

4) H. G. Widdowson. *Stylistics and the Teaching of Literature*, Longman (1975) pp.1-2.

5) “Stylistics is ‘ailing’ ; it is ‘on the wane’ ; and its heyday, alongside that of structuralism, has faded to but a distant memory” とまで危ぶまれた。Paul Simpson *Stylistics : A Resource Book for Student*, Routledge (2004) p.2.

6) 斉藤兆史　『英語の作法』東京大学出版（2000）pp.173-90。

7) 文体論による文学作品の分析過程が，結果として記述主義に偏っているのは確かであるが，実際は，読者側からだけでなく作家側からの視点も考慮に入れながら作品の吟味は行われるので，これまでの文体論が全くの記述主義かといえば異論を唱える研究者も

いるだろう。

8) この日本人の英語力と精読についての記述では，いささか誤解を招くかもしれないが，筆者のポイントは，精読に対してネガティブなのではなく，むしろ，精読は当たり前であるということである。ただ，時として，「効果」の受信という点では，ストレートでない場合もあるということを指摘したいのである。例えば，日本人が英語の小説を精読するということは，ほとんどの場合，かなりの時間をかけて一冊の小説を読み上げることを意味しているが，この読みのスピードは，作家が一般の母国語話者の読者に期待するものではないので，「効果」ということを考えた際，非英語母国語話者である日本人は，外国人独特の効果を味わっていることを忘れてはならない。文体研究と研究者の英語力の問題は，研究者にとっては大変深刻な問題である。ただ，研究者はその点を認識した上で，なお一層の努力をすればよいのであり，そういった論争その他を授業の場へ持ち込んではならない。

9) 研究者の英語力と分野の問題は，あくまでも，研究者の問題である。このような問題に関する発言・記述は，授業に関わる場では，慎重に行うべきであると筆者は考える。したがって，いわゆる入門書において，以下のような記述を目にするのは，残念としか言いようがない。また，この場合は，David Crystal の引用箇所を載せるべきであろう。

> 以上のうち，日本で行われている英語文体論は通例，b)（個人文体論）であると思われるが，作家の言語が分析者の母語と異なる場合は一般にきわめて困難でお奨めできない，という David Crystal の言葉は傾聴に値するのではないか。
>
> 安藤貞雄・澤田治美編『英語学入門』開拓社（2001）p.9。

10) Short（1996）では，内容説明が極端とも言えるほど懇切丁寧になっていることも注目しておきたい。要するに，英語圏においても，授業としての文体論は，高尚すぎないように工夫されているように思われる。

11) Paul Simpson. *Language through Literature*, Routeledge (1997) pp.4-5.

12) "The Wish"の分析に関しては，Ueda, Osamu. "Pedagogical Stylistics : Roald Dahl の "The Wish" を例に"「福岡女学院大学紀要　人間関係学部」第 3 号　2002 年を参照。

13) Holistic education に関しては，岩井眞實・上田修・道行千枝・Evan Kirby。「現代演劇の翻訳・上演による Holistic Education の試み」――パトリック・マーバーの作品を通して――　福岡女学院大学教育フォーラム　第五号　2003 年を参照。なお，本試みは，平成15－17年度日本学術振興会科学研究費（基礎研究(C)）の助成を受けている。また，この試みに関連して，基礎的な演劇教育の現状調査に関しては，福岡女学院大学研究特別予算（平成16－17年度）の助成を受けている。

参考文献

Carter, Ronald. *Language and Creativity : the Art of Common Talk*, Routledge. (2004)

Leech, G. N. A *Linguistic Guide to English Poetry*, Longman (1969)

Leech, G. N. and Short, M. H. *Style in Fiction*, Longman, (1981)

Lodge, David. *Language of Fiction*, Routledge and Kegan Paul (1966)

Lodge, David. *The Art of Fiction*, Penguin (1992)

Fowler, Roger. *Linguistics and the Novel*, Methuen (1977)

伊藤弘之・隈元貞広　『英語学概論』文学テキストの分析を中心とした　篠崎書林（1982）

Nash, Walter. *Designs in Prose*, Longman (1980)

Nash, Walter. *Language in Popular Fiction*, Routledge (1990)

斉藤兆史　『英語の作法』　東京大学出版（2000）

Simpson, Paul. *Language through Literature*, Routeledge (1997)

Simpson, Paul. *Stylistics : A Resource Book for Student*, Routledge (2004)

Short, Mick. *Exploring the Language of Poems, Plays and Prose*, Longman (1996)

Toolan, Michael. *Language in Literature*, Oxford University Press (1996)

Verdonk, Peter. *Stylistics*, Oxford University Press (2002)

Widdowson, H. G. *Stylistics and the Teaching of Literature*, Longman (1975)